

二七七

北越雪譜

初編

上

越後鈴木牧之撰

江戸京水百鶴画

京山人百樹刪定

北越雪譜

初編
三卷

江戸書肆

文溪堂梓行

北越雪譜敘



世之農商而嗜文雅者或不知所以文雅為文雅徒企羨韻士墨客之風標沈酣文酒流連玉月而置生計於不問以傾產業者間亦有之是豈嗜文雅罪哉其人特自取之耳矣鈴木牧之翁者北越塩澤之老農也性嗜文雅而能尚節儉抑賭博不絕誦讀於經營之中而務鉛槧於會計之餘以文遠近之墨客嘗以堪惡之二字

銘自字以故其石久布遠邑石生業亦因以致豐饒矣嗚呼若翁者不徇文雅之名而能務其實者非耶余於翁得一面識於江戸而後特以書訂交者有年于此今茲乙未遠寄示雪譜著北越雪譜者六卷併囑以校訂時方盛夏炎威如燬乃就小窗下試繙尋閱之則越雪恍如耳聞騷屑之聲目見紛霏之影使人頓忘瓢中之苦讀到積疊埋屋行旅不通人以窮乏柴米或

不_レ給_セ則_レ澶_ニ然寒顫肌膚_ニ爲_レ之粟生_セ矣。余因_テ以_レ謂_ク紈袴輕薄子弟_ヲ當_ニ微雪_ニ俄下_ニ紛_ニ舞_ニ空_ニ之際_ニ彫鞍寶勒_ニ飛_ニ玉_ニ塵_ニ於_ニ郊_ニ坰_ニ或_ニ纓帽_ニ棕鞋_ニ蹈_ニ瓊瑤_ニ於街衢_ニ或_ニ重舸_ニ載_ニ妓_ニ或_ニ高樓_ニ呼_ニ酒_ニ直_ニ以_ニ爲_ニ勝_ニ遊樂事_ト曾_ニ不_ニ知_ニ飢寒_ニ爲_ニ何物_ニ若_ニ令_ニ其人_ニ讀_ニ此書_ニ依_ニ以想_ニ其_ニ種_ニ凍餒_ニ之_ニ苦_ニ狀_ニ乎。然則安_ニ去_ニ不_ニ有_ニ能_ニ有怪_ニ非_ニ宴安_ニ之_ニ公_ニ共_ニ而_ニ戚_ニ之_ニ爲_ニ生_ニ戒懼_ニ之_ニ心_ニ者_ニ哉。寧_ニ梓_ニ弓_ニ行_ニ之_ニ至_ニ有_ニ裨_ニ益_ニ世_ニ教_ニ蓋_ニ非_ニ鮮_ニ小_ニ也。間_ニ者

稍_ニ得_ニ秋涼_ニ聊_ニ削_ニ之_ニ駁_ニ難_ニ按_ニ訂_ニ方_ニ畢_ニ者_ニ三_ニ卷_ニ書_ニ賈文溪堂見而喜_ニ之_ニ謀_ニ梓_ニ以_ニ之_ニ余_ニ寄_ニ簡_ニ以_ニ告_ニ翁_ニ曰_ニ雪中_ニ閉_ニ戶_ニ漫_ニ筆_ニ豈_ニ敢_ニ效_ニ梓_ニ耶_ニ於是_ニ子_ニ不_ニ復_ニ候_ニ請之_ニ於_ニ翁_ニ奉_ニ以_ニ付_ニ之_ニ翁_ニ之_ニ嗜_ニ文_ニ雅_ニ而_ニ能_ニ發_ニ其_ニ實_ニ以必_ニ笑_ニ領_ニ之_ニ而_ニ已_ニ翁_ニ之_ニ稿_ニ本_ニ國_ニ字_ニ之_ニ間_ニ淺_ニ字_ニ者_ニ嘗不_ニ添_ニ音_ニ訓_ニ之_ニ假_ニ名_ニ余_ニ今_ニ盡_ニ添_ニ之_ニ以_ニ便_ニ童_ニ蒙_ニ云_ニ爾天保六年乙未秋九月朔日

江戸 京山人百樹并書



此書の稿本圖ハ別冊とて或ハ其説ハ大図に描くと添ふとあり
皆牧之翁が自筆の草画也此等梓行の爲にせざるに因り
洪纖重複あり今梓に臨てその圖の過半を省き其図を新に
考れを存して卷中、夾刺するハ單冊に尽し難故也其刻ハ
是刪定の考に依る所也余嘗て原図を覽き雪中の瘡状
混錯を走墨と爲て通曉し難きこれ靴中の瘡痒あるが如
く唯翁が草圖に倣ひて寫し描きたる而已或原圖の梓に入るも則
ち其或加ふ或減る有る圖をききの其説に據て其圖を作じもあり蓋余未だ
越地を踏まず越雪の真景を知らず茫然たり故に雪圖に於て違漏あり
知るべき其誤を編者、賜ふを乞ふ 乙未秋 京水百鶴

京山男少年



掘除積雪之圖

枕間簾、
 雪華飛天
 曙空未白
 四圍烟絕
 樵林人不見
 風寒曉徑犬
 空飢懶乘冷
 斃促高履屐
 拂雪先集敵
 衣屋裡要知
 春已到牆頭
 三月早梅紅
 右賦小越雪景

江戸 醉石山人祿題

京水筆

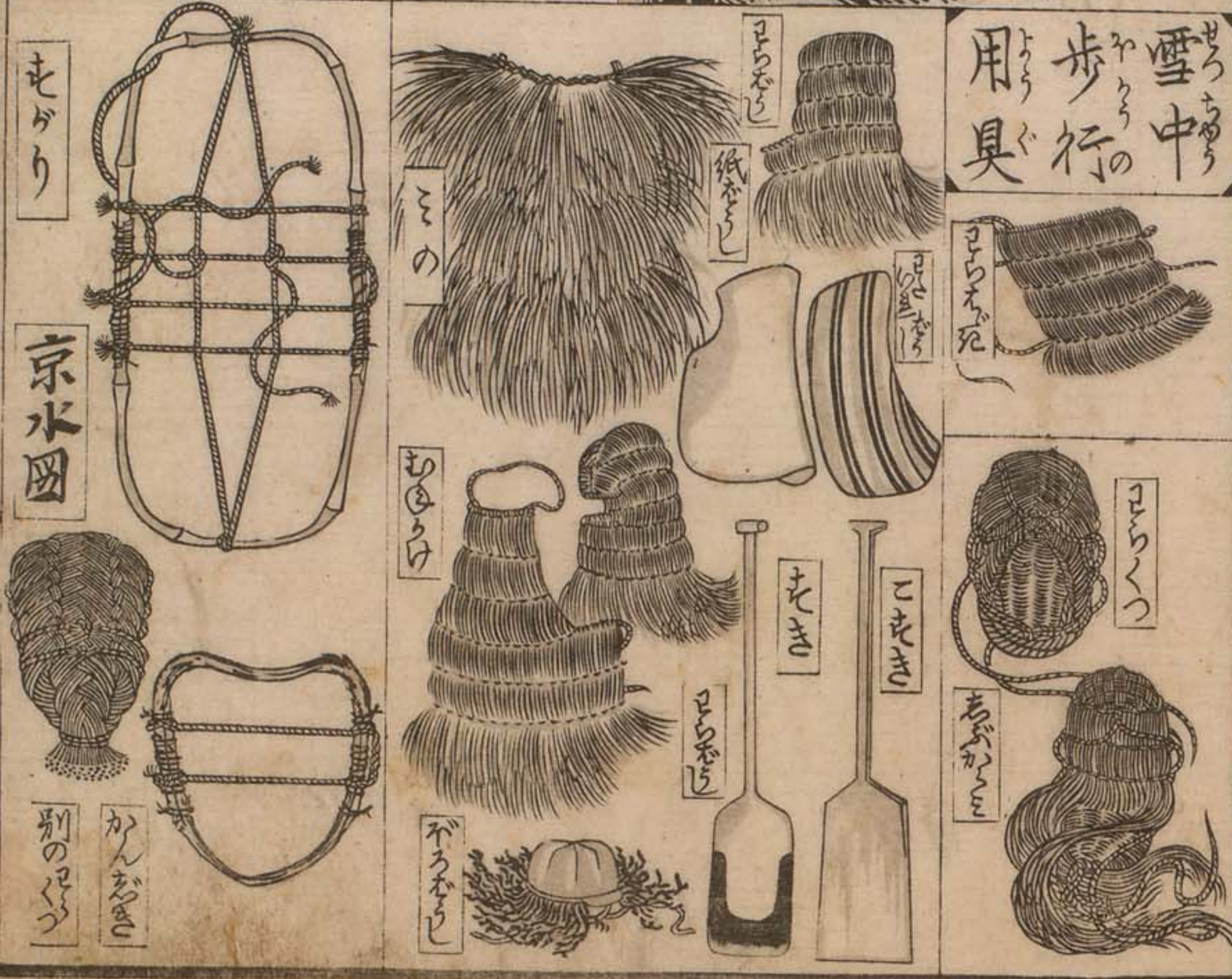


屋上雪掘圖

縫を穿て雪行圖



雪中歩行の用具



まがり

京水圖



別のくつ
 かんちき

北越雪譜初編中上卷之上目錄

地氣雪ちきせうと成るな弁べん

雪の深淺しんせん

雪の用意ようい

雪の堆量たいりょう

雪を拂ふはらふ

雪道せうだう

胎内潜たいないせん

熊捕くまとら並なら白熊しろくま

雪中の虫むし

雪中の火

雪顔ゆづりかほ

雪の形状けいじょう

雪意ゆきい

初雪はつせう

雪竿ゆきざん

沫雪わかしゆ

雪蟄ゆきじり

雪中の洪水こうすい

熊人を助たす

雪吹ゆきふ

破目山やぶめさん

○通計二十一條

越後塩澤 鈴木牧之 編撰

江戸
京山人百樹
刪定

○地氣ちき雪ゆきと成なるる弁べん

凡天より形氣爲して下す物。雨。雪。霰。霰。霰。電。露。ハ地氣の粒珠なる所霜
 ハ地氣の凝結する所冷氣の強弱よりして其形を異にするものと地氣天より上騰形を爲
 て雨。雪。霰。霰。霰。電。と云ふことも温氣をよりて水ハ地全體より元の地
 飯より地中深けよりかきあらず温氣あり地温より得て氣吐天より上騰する人の氣
 息のどより昼夜庁時も絶るものなり天も又氣吐て地より下す是天地の呼吸なり人の
 呼吸と吸とのごとく天地呼吸して萬物を生育之天地の呼吸常失ふ時ハ暑寒の時ハ應
 せむ大風大雨其餘さめぐの天変ある天地の病る天より九つの段ありことを九天と云ふ
 九段の内最地より近き所を太陰天と云ふ地城より高き四十八万
 太陰天と地との間より三つの際

雲譜卷之上

文溪堂藏

あり天小近を熱際とのひ中を冷際とのひ地小近を温際とのひ地気ハ冷際を限りと
して熱際小至らず冷温の二段ハ地を去るる甚で遠うず富士山ハ温際を越て冷際
小ちうきゆ急絶頂ハ温氣通せざるゆゑ艸木を生ぜず夏も寒く雷鳴暴雨を温
際の下小える雷と夕立ハをんきの雲ハ地中の温氣より生ざる物も多小其起る形ハ
湯氣のごとく水氣沸て湯氣の起と同ドる之雲温る氣凝以て天小升りかの冷
際小いてこま温る氣消て雨とる湯氣の冷て露とるが如く冷際小いてこま雲散
さて雨露の粒珠ハ天地の氣中ハ在る凝以て艸木の實の山凝りしるハざるも氣中ハ
生ざるゆゑ雲冷際小いて雨とる時天寒甚し此時ハ兩氷の粒とる
りて降り下る天寒の強と弱と小より粒珠の大小凝為す是を霰と云々
電ハ夏ありをの弁地の寒の寒強き時ハ地氣形凝るるに天小升る微温湯氣のごとく
天の曇ハ是ハ地氣上騰にと多けま天灰色をうて雪るるんと曇るる雲冷
際小到り先雨とる此時冷際の寒氣雨凝氷す死力たるるゆゑ花粉を為して

下は是雪と地寒のよきことよきことよりて氷の厚と薄との如く天小温冷熱の三
際ある人の肌ハ温小肉ハ冷ハ臟腑ハ熱と同一道理之氣中萬物の生育悉く天
地の氣格小随ふも是余が發明ふらず諸書小散見しる古人の説也

○雪の形

凡物を視る眼力の限りありて其外を視るべからざるは人の肉眼を以て雪を以て
一片の鷲毛のごとくも数十百片の雪花併合して一片の鷲毛を為し是を驗微
鏡小照し視るべ天造の細工たる雪の形状奇と妙とある下小図を如く其形の
齊くあるかの冷際小於て雪となる時冷際の氣運ひてかざるも急雪の形氣小應
じて同くあるも急雪も肉眼のかざる至微物也昨日の雪も今日の雪も一望
の白糝糊を為しと下の図ハ天保三年
五十五品の内ハ膳寫ゆき雪六出は為
御説小曰凡物方體ハ必ハを
以て一圓圖と山體ハ九を六出以て一圓圖ハ定理中の定数誣へるべし云云雪を六

雪譜卷之上

文溪堂藏

の花といふ

御説を以て

愚按小四ハ天の正象方ハ地の実位之天地の

氣中ハ活動する万物悉く方圓の形失つて一圓以て人の體方小く方

るが四ハて四ハて是天地方圓の間小生育も急天地の象氣たるも急る子
の親小似る小相同し雪の六出する所以ハ物の負長數ハ陰半數ハ陽ハ人の體男ハ

陽も急九出
・頭・兩耳・鼻・兩手
・兩足・男根
女ハ十出を
兩乳あり九ハ半の陽十八長の陰ハ

且ども陰陽和合して人成るも急男小無用の兩乳ありて女の陰小く急女小不用の
陰舌ありて男小く急氣中ハ活動萬物此理小漏るる急雪ハ活物小あり急

寢る所ハ活動の氣あり急六出する形の陰中或陽小象る山形を具し急
もあり水ハ極陰の物急一滴も急時あるる急四形を急を落ると急小活

萌あるも急小陰小く急陽の四を急る急天地氣中の機關定理定格ある
奇に妙に愚筆小急が

○雪の深淺

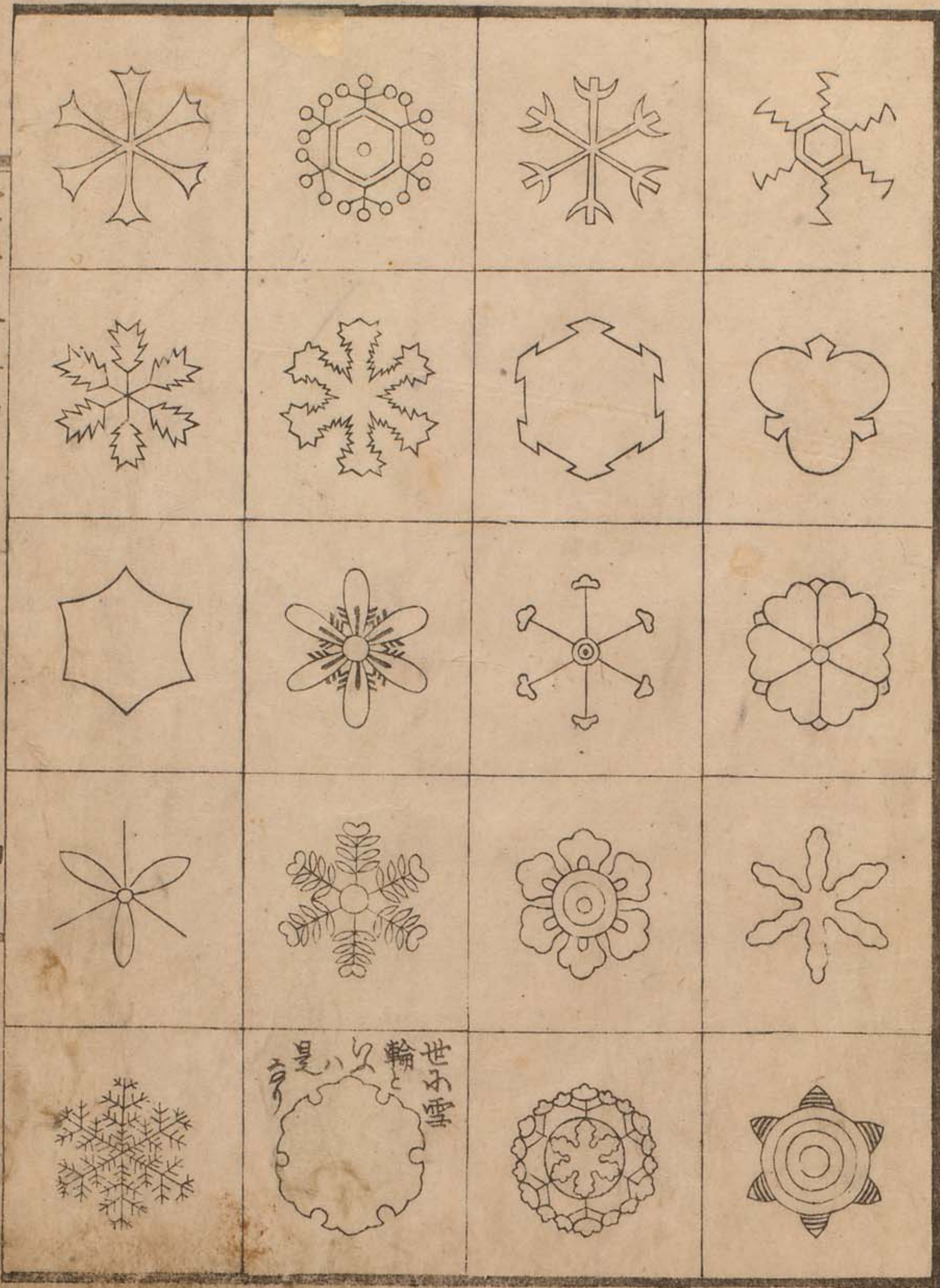
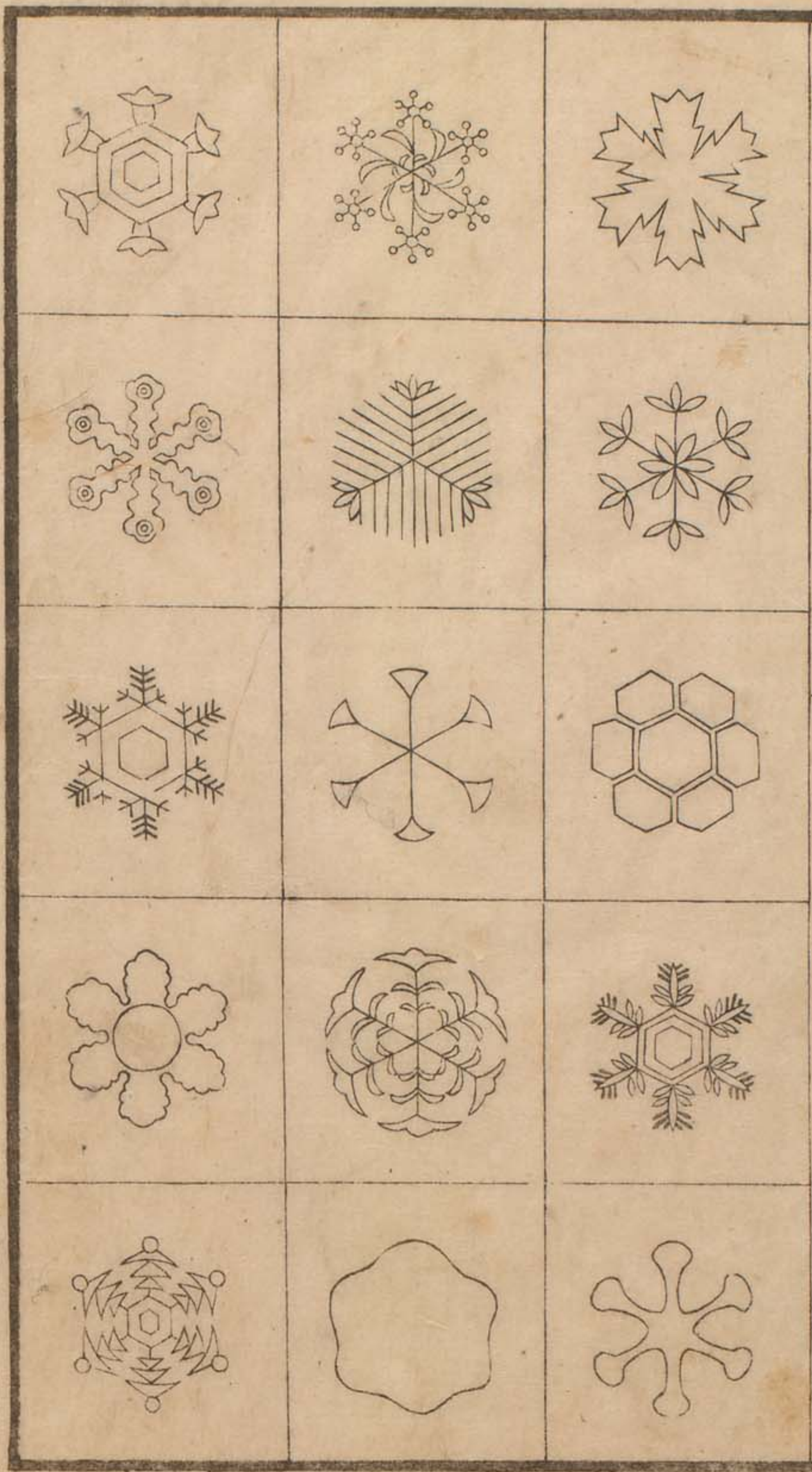
左傳隱公八年平地尺小盈を大雪と為と見えたる其国暖地なるを唐の韓愈雪を豊年嘉瑞といひも暖国の論とさまで唐土も寒国八月雪降る五雜組そ小入るる暖国の雪一尺以下なる山川村里立地小銀世界をあり雪の飄ひら翩ひらたるを觀て花小諭へ玉小比あやう勝望美景を愛し酒食音律の樂を添そ画小寫う詞小つゝ稱觀するハ和漢古今の通例なることも是雪の浅き国の樂と我越後のごとく年毎小幾丈の雪を視み何の樂きするわん雪の為小力を尽し財を費し千辛万苦する下小説く所を視てかひいさるるぞ

○雪意

我國の雪意ハ暖国小均ひとからばを九月の半より霜を置おて寒氣次第小烈いく九月の末小至いバ殺風肌を侵おて冬枯の諸木葉を落し天色雲とて日の光ひかり看みざる連日まんじつ是雪の意い天氣朦朧もうろうする数日小く遠近の高山小白を点まて雪を觀みせしむこと紙里言小嶽廻たけまわといふ又海ある所ハ海鳴り山やまさき処ハ山やま

○驗微鏡を以て雪状を審み視る圖
 此圖ハ雪花圖說の高撰中ハ在る所五十五品の
 内を略寫し是則江戶の雪之万里をへるる
 紅毛の雪もこと小同し凡物ある事高撰中ハ
 詳し以て天の无量あるを知らん

天機凡々百花中六出奇葩別示工
 詳雪言篇窮極冊茲抽珍図辱
 書凡 題雪花圖 收之 野 四



世小輪
 是ハハ
 有

遠雷の如くあゝ然里言ふ胸鳴りといふことを聞く雪の遠くを渡る
をある年の寒暖ふつとて時日いささかゆるゆとだけまうりどうり秋の彼岸
前後ふあり毎年かのおと

○雪の用意

前ふりしるぐぐ雪降んとするは量り雪ふ損せしむる為小屋上へ修造を加
梁柱廂家の前の屋翼を里言ふらうり其外まて居室へ係る所力弱いとを補ふ雪
小潰とざる為庭樹の大小小随ひ枝の曲へて縛束椶丸太又ハ竹を添へ杖とす
て枝を強くしむ雪折をいと冬草の類ハ荒庭を以覆ひ包む井戸ハ小屋を懸
厠ハ雪中其物を荷さむる備を以雪中ハ一点の野菜もあけむる家内の人數
小あぐひく雪中の食料を貯ふあぐひく土中ふうぐり又ハ其外雪の用意
小種々の造作をるま筆ふそぐ

○初雪

暖国の人の雪を賞翫する前ふりて江ノ雪の降る年もあるが初雪
ハこそとて小美賞し雪見の船小舟を携へ雪の茶の湯小賓客を招き青樓ハ雪状
居統の媒とて酒亭ハ雪を來客の嘉瑞とて雪の爲小種小遊樂をなす
擧ぐり雪を賞するの甚しきハ鯉花のあつてつる所ハ雪国の入と見えてを聞て
羨むるハ我國の初雪を以てこゝ小比とて樂と苦と雪泥のちひとて越後国
ハ北方の陰地とて一國の内陰陽を前後をいんとて天ハ西北ふたつ由ふ西
北を陰とて地ハ東南ふたつ由ふ東南を陽とて越後の地勢ハ西北ハ大海に對し陽氣
ハ東南ハ高山に連りて陰氣ハ西北ハ郡村ハ雪浅く東南の諸邑ハ雪深し是ハ陰陽
の前後あつてふ似たり我住魚沼郡ハ東南の陰地とて巻機山。苗場山。八海山。牛が
嶽。金城山。駒ヶ嶽。免ヶ嶽。浅州山等の高山其餘他國ハ聞えざる山ハ波濤のごとく
東南に連り大小の河も縦横をなす陰氣充滿して雪深き山間の村落も雪の
深をあらへ冬ハ日南の方を周る北國ハまじく寒し家の
内とて北ハ寒く南ハあつて同じ道理と我國初雪を視る遅と速とハ

雪譜卷之上

五

文溪堂藏

其年の氣運寒暖あつて均くはとて初雪ハ九月の末十月の首ふあり
我國の雪ハ鷲毛をうへ降時ハうへ粉砕をうへ風又雪を助く故ハ一晝夜
小積所六七尺より一丈ふ至る時もあり往古より今年ふいて此雪此國ハ降る
ゆゑは暖国の人のごとく初雪を觀て吟詠遊興のさへハ夢中もあらず今年も
又此雪中ふ在るやと雪状悲ハ邊郷の寒國ハ生る不幸といへ雪を觀て樂む
人の鯉花の暖地ハ生る天幸を羨むらんや

雪の堆量

余が隣宿六町の俳友天吉孝人の話ハ妻有庄ふあむ頃聞ふ千隈川の邊の雅
人初雪より天保五年十二月廿五日までの間雪の下毎小用意ある所の雪を尺をりて
量りしハ雪の高さ十八丈ありといふと此話雪國の人を信がうといふもつ
りし思量ハ十月の初雪より十月廿五日までを日数八十日の間ハ五尺の雪ハ
四丈ふいて隨て下ハ隨て掃ふ処ハ積でるるや又地ハあま減るるや

かきとめて是をわたりて我國の深山幽谷雪の深き所よりあつて天保五年ハ我國
近年の大雪なりと云ふ右の話誣ふべし

○雪竿

高田御城大手先の廣場小木を方小削り尺を記して建のふ是を雪竿といふ長二丈と
雪の深淺公税小係るを以てさる高田の俳友楓石より春翰の仲冬雪竿を
又とて當地の雪此節一丈小餘なりといひ来り雪竿といふは越後の事とて俳
句にも見えさる此国小於て高田の外无用の雪竿を建る処貴いなり今ハ風
雅をもつて我國小遊人雪中を避て三夏の頃此地を踏ぬ越路の雪をさる然る
越路の雪を言の葉小作意もなかりありて我國の心小笑ふべき多し

○雪を掃ふ

雪を掃ふ落花ををらふ對して風雅の事とて和漢の吟咏あまのうたえさるども
かゝ大雪ををらふ風雅の状あり初雪の積りたるををらふふかけ再び下る

雪譜卷之上

文漢堂藏

雪を添へて一丈小あまるりもあまバ一度降バ一度掃ふ雪浅きは是を里言小雪掘といふ
土を掘ごとくするゆゑ小斯い掘ざる家の用路を塞ぎ人家を埋て人の出べき処
もろろ力強家も幾万斤の雪の重量小推碎んをかろろ名家とて雪を掘るハ
ろ掘るハ木を作りたる鋤を用ふ里言小をさといふ則木鋤と掘といふ木をりて
作る木質輕強と折るる且輕形ハ鋤小似て又廣雪中第一の用具とて
山中の人とをを作りて里小賣家毎小貯さるる雪を掘る状態ハ圖小あり
カ如掘る雪ハ空地の人小妨るに処山のてり積上るを里言小掘揚といふ大家
ハ家夫を尽て力たさる掘夫を備ハ幾十人の力を併て一時小掘尽る事を急小爲
る掘る内ハ大雪下目立地小堆く人カ小あさるゆゑ
るをのふ小家の金貢も掘夫をやとへる費もさる男女をいひて一家雪をりる吾里小
くさる雪さる処ハ皆然なり此雪いづくの力をつひかいくくの錢を費終日
かりる跡ハその夜大雪降り夜明てさる元のことかゝ時ハ主人ハさる下人も頭

を低て歎息をつくのそ大低雪ふごとく掘ゆふ里言ふ一番掘二番掘といふ

○ 沫雪

春の雪ハ消ゆるときをりつて沫雪といふ和漢の春雪消ゆるときを詩哥の作意とて是暖
国のより寒国の雪ハ冬を沫雪といふべしといふ冬雪ハ消ゆるときをりても凝
凍こもく脆弱なるり淤泥のごとく故冬雪の雪中ハ機紐を穿て途を行里言ふハ
雪を漕といふ水を渉る状に似たるゆふや又深田を行とて初春ふり雪を雪
悉く凍り雪途ハ石を布とてくまば往來冬よりハ易
暖国の沫雪といふ氣運の前後かくのおど

○ 雪道

冬の雪ハ脆きゆふ人の踏固まる跡をゆくハ雪をけきと往來の旅人一宿の夜大雪降
ふとてある一条の雪道雪小埋り途をりしゆふ郊原ふりてハ方位をりしに
此時ハ里人幾十人を傭ハ機紐めて道を踏開せ跡小随て行此費幾緡の錢を費と

驛中積雪之圖



理家大雪感幸
年慣習幸光不
恨天梅柳未衰
云月尽去在
采代法妍
鈴木牧之題

野土



京水筆

一 人家の雪を掘る事本
文のうきと一 二 雪をやりて
洞のうきと一 三 雪をやりて
雪中作り物を賣る事本
やとのふ 四 雪中山の如く
野なる雪あり

ゆゑ貪とらしき旅人ハ人の道みちをいづるを待まちて空うつく時ときを移うつり健足けんそくの飛脚ひやくといふとも
雪途ゆきみちを行ハ一日二三里さんりふ過へぎ楕だめて足自在あしざいなる雪脰ゆきうを越こえ冬ふゆの雪中ゆきなか一
の歎難うんなん之春ハ雪凍ゆきこて鉄石てつせきのごとくなる雪車ゆきぐるま又雪舟ゆきふねの字なを以もつて重おもきを來きり人ハ雪
車小物をのせおのきものりて雪上ゆきうへを行ゆる舟のごとくも雪中ハ牛馬の足立あしだてざるゆゑも
雪車ゆきぐるまを用ふ春の雪中重おもを負おしゆる生馬うま小勝せうしやうる雪車ゆきぐるまの制作せいさく別べつ記き形かたち大小だいせう雪国ゆきくにの便べん
利り第一だいいちの用具ようぐ之これも雪凍ゆきこりたる時ときふあつさば用もちひぐりゆゑも里人りじん雪舟途ゆきふねみちと
唱となふ

○雪蟄ゆきも

凡雪おほし九月末くわがつまつより降ふりたりて雪中ゆきなかハ春はるを迎むかふ正二せいじの月つきハ雪尚深ゆきなほふか三四さんしうの月つきハ至いたりて
次第しだい小解せうかい五月ごがつふいて雪ゆき全ぜんく消きえて夏道なみちとなる年としの寒暖かんぬんふりて四五月しごがつふいて春はるの
花はなども一時ひとときふいてささば雪中ゆきなかハ在ある凡おほハ月一年つきいちねんの間雪ゆきを看みざるみ僅ひづ小四せうしヶ
月つきも金かねく雪中ゆきなかハ蟄もるハ半年はんねん之これを以もつて家居けの造つくりハさう之これ萬事ばんじ雪ゆきを御お示し

ぐと専と財を費力を尽さず紙筆ふ記ぐ農家にとて夏の初より秋の
末まで五穀をも收るゆゑ雪中稲を刈りあり其忙しみの千辛万苦暖国の農業小
比をも百倍とまじとて雪国小生る者幼推より雪中小成長とて夢中の辛を
あつとてとて雪を雪ともあつとて暖地の安居を味さるゆゑ女はとて男も十人小
七人ハ是とあつとて住バ都とて鰯花の江戸奉公する年ありて後雪国の故郷小皈
る者あつとて又十人ありて七人の胡馬北風小嘶き越鳥南枝小巢く故郷の忘る世
界の人情とて雪中廊下小窓雪垂をわやとあつとて下雪吹をわやと窓も又
て雪を用ふ雪あつとて時ハ巻て明をさ雪下り盛る時ハ積る雪家を埋て雪と
屋上と均く平ふり明のとてきとて昼も暗夜のごとく燈火を照て家の内ハ夜
昼をわと漸雪の止る時雪を掘て僅小窓をひき明をひく時ハ光明赫奕する
佛の国小生るらと此外雪簞りの銀難さめとあつとてくけとあつとて
鳥獸ハ雪中食无をありて雪浅き国去るもあつとて一定する雪中簞り居て

雪譜卷之上

九

文溪堂藏

朝夕をるもの人熊と

○胎内潜

宿場と唱所家の前小庇を長くのぞて架る大小の人家とてかのごとく雪中ハ
さうく平白も往来とてさうく雪中の街ハ用さる如くさうく人家の雪をさうく積次
第小重て両側の家の間小雪の堤を築さる如くさうく於て所小雪の洞をひき庇より庇
小通ふとてを里言小胎内潜とて又間夫とて小間夫とて金掘の方言るを借て用とて
間夫の本義ハ妻妾の宿外の家が続る処ハ庇はき高低をさうくさうく雪の堤を往来
奸淫するをいふとてとて人の足立さき処あま一條の道を開き春ふいて雪堆き所ハ壇層を作りて通
路の便とて形画階のごとく所の者ハとて登下する小脚小慣て一歩もあまつとて
他国の旅人さうく怖る移歩かつて落る者ありあつとて雪中小身を埋む視る人ハ
てを笑ひ落るものハとてを怒る難所を作りて他国の旅客を勞ハしむる
求る所為小あつとて此雪を取除とてさうく人力と錢財とを費さるゆゑ寸導ハ壇成

作りて途を問くをもち初雪より歳を越す雪漬るまでの事せんきふ紙幣細小記せんきふ小冊
あはるゝゝゝゆふ省てある事甚多

○雪中の洪水

大小の川ふ近き村里初雪の後洪水の災ふ苦むあり洪水を此国の俚言ふ水
揚といふ余一年閑といふ隣驛の親族油屋が家止宿せし時頃十月のそり
ゆき雪八九尺つりるをりありて夜半ふいて近隣の諸人叫び呼りつゝ立
騒ぐ声小睡を驚く何なりやんと胃をもどして卧する間ををせりけり家の主兩
手小物を提水あがりて裏の掘場立退るといひて持てる物を二階運びゆく
勝手の方立いでて家内の男女狂気のごとく駐まりて家財を水に流さどと
手當をいふ取退る水は低く随て潮のごとくあきり已に席を浸し庭に漲る次第
ふ積る雪所とて雪のうづるは雪光暗夜を照して水の流るありさあはるゝと
いふゝゝゝ余い人助けりて高所へ逃登り遙小驛中を眺み提灯炬を燈つと

雪譜卷之上

十

文溪堂藏

大勢の男ども手く木鋤をうけ雪を越水を渉て声をあげてふ来るは
水揚せざる所の者どもも馳あつて川筋を閑き水を落さんとて闇夜ゆく
まぐさゝえと女童の泣叫ぶ声或は遠く或は近く聞えあはるゝのありさぬ燃
残りたる炬をたより人馬も首さけ水に浸り漲るをわたりて馬を助
んとする帯もせざる女片手小児を脊負提灯を提て高処へ逃のび近けり
とてあはるゝ命とつりぐるをを恥しあはるゝ可災事
可憐なる可怖なる極きさあぐ筆ふてゝやうく東雲の頃ふ至り
て水も落りて諸人安堵のかいひをうぬ〇とて我郷雪中の洪水大く
初冬と仲春とふり此閑といふ驛は左右人家の前二道づの流あり末は魚野川へ
落る三伏の早中も乾くやうに清流水にぬる家毎ふ此流を以て井水の代り
あつても桶あつても汲むに流るる平日の便利井よりも勝るなり初雪の
後十月のころもふふの二條の小流雪の為に降埋りて流水は雪の下ふあり故

小家毎こけい ごとに汲くみへき程ほどに雪ゆきを穿うがて水用みづようを弁べんずる所ところも一夜ひとよの雪ゆきに埋うめらるゝと
あまを再またうづる屢しばしばあり人家とんちにちうに流ながさかぬのでくるまばこの二條ふたぢうの流ながの
水源みづもとも雪ゆきに埋うめえ水用みづようを失うしふのまゝに水みづあがりの懼おそあるゆゑ所ところの人力ちからを併あはせて流
のかり口の雪ゆきを穿うがるゝりささども人毎ひと ごとに業用げふようにささるゝ時ときを失うしるゝ又ハ一夜ひとよの大
雪ゆきふかの水源みづもとを塞ふさぐ時ときハ水みづ溢あふて低所ひきを尋たづねて流ながる驛えき中ちゆうハ人の往來やうらいの爲ために雪ゆきを踏ふへ
て低所ひきに流水りうみづ漲あふり来きり猶なほも溢あふて人家とんちに入り水難みづがたに逢あはるゝ前まへにけりささども
幾百人いくばくにんの力を尽つして水道みづみちをひらきささども家財けざいを流ながし或ハ溺死できふかまふもあり。又
仲春ちゆうしんの頃ころの洪水こうすいハ大おほくハ春はるの彼岸ひがん前後ぜんごに雪ゆきしもど消きえず山やまハささるゝ田圃たふも漸げんに
さる曠平くわうへいの雪面ゆきめんもさ枝川えだがわハ雪ゆきに埋うめえ水みづハ雪ゆきの下したを流ながえ大河たいがといふども冬ふゆの初はつより
岸きの水みづもづ氷こほりりて氷こほりの上うへに雪ゆきをつもせつもの雪ゆきもちるゝ氷こほりりて岩いのこゝに岸きの
氷こほりりさる端次たんじ第だいに雪ゆきふりつものちうハ兩岸りやうあんの雪ゆき相合あひありて陸地りくちといふゝ雪ゆきの地ちと
るささる春はるを迎むかへて寒氣かんき次第しだいに和なるゝその年としの暖氣だんきふつとて雪ゆきも降ふり止やまる二月

雪中洪水之圖



京永樂



の頃水気ハ地気よりも寒暖を知るるをすきものゆゑハの水面ハ積りたる雪下より
解く凍りたる雪の力も水ハちやんハ弱くあり流ハ雪ハ塞ぎて狭くありたるゆゑハ水勢
すもく烈く陽氣を得ず雪の軟る下を潜り堤のきまぐれく譬ふいふ寢耳ハ水
の災難ハあらず雪中の洪水寒国の艱難暖地の人憐なり右ハ其一をいふものと雪中
の洪水地勢ハより種々各あり詳ハ弁ドグ

○熊捕

越後の西北ハ大洋ハ對して高山なり東南ハ連山巍々として越中上信奥羽の五ヶ国
小跨り重岳高嶺肩を並べ数十里を走るゆゑ大小の獸甚多し此獸雪残
避る他国へ去るもありさるるもあり動どて雪中ハ穴居するハ熊のものと熊膽ハ
越後を上品と云ふ雪中の熊膽ハことごとく價貴し其重價を得んと欲して春暖を得
て雪の降止るころ出羽あつりの臍師ども五七人心を合せ三四疋の猛犬を牽き米と塩
と鍋を貯水と薪ハ山中在るハ随々用をとり山より山を越登ハ獵して獸を食

と一夜ハ樹根岩窟を寝所とす一生木を焼て寒を凌且明とす着るもく
寝所をるは頭より足ふけるも身小着る物悉く獣の皮を以て之を作る遠く
視るば猿ふて顔ハ人也金華を衽とて人々を以て之を此者ハ志野ハ我國の
熊ふありて我山中ふり場所と見え立木の枝藤蔓を以て假ハ小屋を作り
之を居所とす一犬を牽四方小別と熊を寝ハ熊の穴居る所を認バ目
幟をのりて小屋ふり一連の力を併て之を捕るその道具ハ柄の長さ四尺斗り
の手鎗或ハ山刀を薙刀のごとく小作りするもの鉄炮山刀斧の類ハ刀鈍時ハ野
砥を以て自研ぐ此道具も獣の皮を以て鞘とす此者ハ春ふもかきず冬より
山ふ入るをりもあり

そもく熊ハ和獸の王猛く義を知菓木の皮虫のものを食とて同類の獸を
喰ヒ田圃を荒れ稀ハ荒れを食の尽する時詩經ハ男子の祥と或ハ六雄將軍
の名を得るも義獸とす夏ハ食を以ての外山嶺を掌中ハ探者各

雪譜卷之上

の威勢ハハを鑑く飢を凌ぐ北杜同く穴ハ熊の穴北の子ハ子とハハ
トくこの其威勢を所ハ大木の雪類ハ倒とす朽と洞とハハ岩間土
穴ハ心ハ随て居る処とす雪中の熊ハ右のごとく他食を求るゆゑその
膽の良功あるハ夏の膽ハ比ハ百倍ハ我國ハハ・鮎膽・琥珀膽・黑膽と唱へ色を
あつて之を琥珀と上品と黒膽を下品とハ偽物ハ黒膽ハ多し
さて熊を捕ハ種々の術ありかま居所の地理ハあつて捕得ハハ術をや
熊ハ秋の土用より穴ハ入り春の土用ハ穴より出るとハ又二説ハ穴ハ入りてより穴を
出るまで一睡ハ秘とハハ人の視ざるとうるハ信ト
沫雪の條ハ入るごとく冬の雪ハ軟やと足場ハたぬ多熊を捕ハ雪の凍る春
の土用より穴よりいんとする頃を程とき時節とす之岩壁の裾又ハ大樹の根
ろハ威勢を捕ハハ壓とのハ術を用ハ天井釣とハハその制作ハ木の枝藤の
蔓ハハ穴ハ倚掛ハ棚を作りたるの端ハ地ハ付ハ抗を以て之を縛りたるの

横木小柱ありて棚の上小大石を積る横木より繩を下し繩小輪を結びて
穴小臨みてを蹴綱といひ此蹴綱小轉機あり全く作りをりてのち穴小のぞ
て玉蜀烟州の壁のふ熊の悪む物を焚きまじり小扇く烟を穴小入るま熊烟り小
噓く大小怒り穴を飛出る時かろるる蹴綱小觸るま轉機より棚落て熊大石
の下小死を手を下さば一熊を挿の上術は熊の居所よりとまて樵夫を
折ふよりてはるる

又熊捕の場数を踏る剛勇の者一連の獵師を熊の居る穴の前小待せ己一人
ひろく蓑を頭より被りひろく山小ある州の名この小作穴小をりて這入り熊小
蓑の毛を觸るま熊小の毛を嫌ふものゆゑ除て前小をむ又後よりその毛を障
熊又小をむ又さり又まんぐ熊終り穴の口小いりてを視て待かす一
獵師とも手練の鎗尖ふけて突齒一鎗失とま熊の一揆小一命を失ふその危を
踏る熊を挿小僅の黄金の爲金慾の人を過る色慾よりも甚一さま黄金ハ

道を以て得べし道を以て得べし

又上小覆ふ所ありてその下小雪のつるるを知り土穴を掘り執るもあり然
どもてふも雪三五天ハ吹積る熊の穴ある所の雪小入るる細しありて管のこと
こは熊の氣息あり雪の解る孔ハ獵師こまをるま雪を掘り穴をあけ
木の枝柴のふを穴小挿入ま熊こまを探りて穴小入るかきまるるま
穴通りて熊穴の口小いづる時鎗ふける突よりとまま数足の猛犬いれ小飛か
て竄つて犬ハ人を力とて人ハ犬を力とて殺もあり此術ハ控木小よりするま
まるる

○白熊

熊の黒ハ雪の白ごとく天然の常あるま天公機を轉どく白熊を出せり
○天保三年辰の春我々住奥沼郡の内浦佐宿の在大倉村の樵夫八海山小入り
時いふふて白き兎熊を奪り世小珍とて飼ひきり小香臭師江小見世もの師の古風あるもの

こまを買ひてあり市場又ハ祭礼まで人の群る所へて有物ふせしある所
余もつる大さ狗のこまハ杖ハ金く熊ふて白毛雪を欺きあるも光澤ありて
天鷲織のこまハ眼ハ紅くより人ハ馴くあるも愛べたのこまハこま持
あるもつる終をある白龜の改元白鳥の神瑞ハ幡の鳩源家の旗まで
白きハ 皇国の祥象あるも天機白熊をいふも 昇平万歳の吉瑞ハ
山家の人の話ハ熊を殺て二三疋或ハ年歴する熊一疋を殺も其山あり
を荒るあり山家の人こまを熊荒とあるも山家の農夫ハ需て熊
を捕るありとあり熊ハ霊あり事古書あるもえり

○熊人を助

人熊の穴ハ隙より熊ハ助らるゝとある話諸書ハ散見あるも其地をある
る人の語りハ珍けあるも記す○余若り一時毒有の庄ハ内ハ在
用ありて西三日逗留せし事あり頃ハ夏ありても多客舎の庭の木うげハ

庭をあるも納涼居ハ主人ハ酒を好む人老酒着をあるも余ハ酒を
嗜むるも茶を喫居ハ一老夫ハ来り主人を視て拱手て礼をある
後園ハ行んとあるを主呼とある老夫を指すある此使父ハ壮年時熊ハ助られ
る人ハ危き命をなせり今年ハ十二まで健ハ長生ある可賀老人ハ識面
ありある老夫完満とて再々余とある熊ハ助らるゝとある珍
説ハ語りて聞せあるといひハ主人余ハ前ハ在ハ茶盤をとりある一盃喫て
酒を満盃とつぎある老夫庭の端ハ坐ハ酒を視ハ笑をあるも続ハ三盃を
喫ハ古鼓とて大ハ喜びある話説ハ我廿歳二月の末ハ薪をとある
雪車を引ハ山ハ入りハ村ハありハ所ハ山伐つてあるも足場ハ
ある山ハ重踰ハある薪とある柴あるありハ自在ハ伐ハ雪車哥
うハあるハ徐ハ来雪車ハ積ハ縛つけ山ハ刀をさハ低ハ随ハ来り
方ハ来下りあるハ束の柴雪車より轉ハ落谷を埋ハ雪の裂隙ハある

凍りし雪陽氣を得ず なるゆゑ捨て飯人も惜まざる所の所ふいり柴の枝小
裂るる常と

手をうけ引上んとするふも動ず落る勢小撞いさるる人さるる重

くより引上んと匍匐して双手を延し一声うけく上んとあたる時足小踏力

ありゆゑものさちうふ己が軀を轉倒雪の裂隙より遙の谷底墜けり

雪の上を薄落るゆゑ幸小疵うけむさるる夢のやうくやうくふ心付

上をふまふ雪の屏風を建てるごとく今ふも雪類やせんと下ふあつて

生る心地はく暗くくせめて明方ふいぞんと雪小埋る狭谷間をつゑ

やうくふく空を見る所ふいりふ谷底の雪中寒烈く手足も龜手

一歩もとびぐくかくて凍死べし心を励み猶途もあるくと百歩をより行

うけん滝ある所ふいり四方をふるふ谷間の途極ゆく甕小落る鼠のごとく

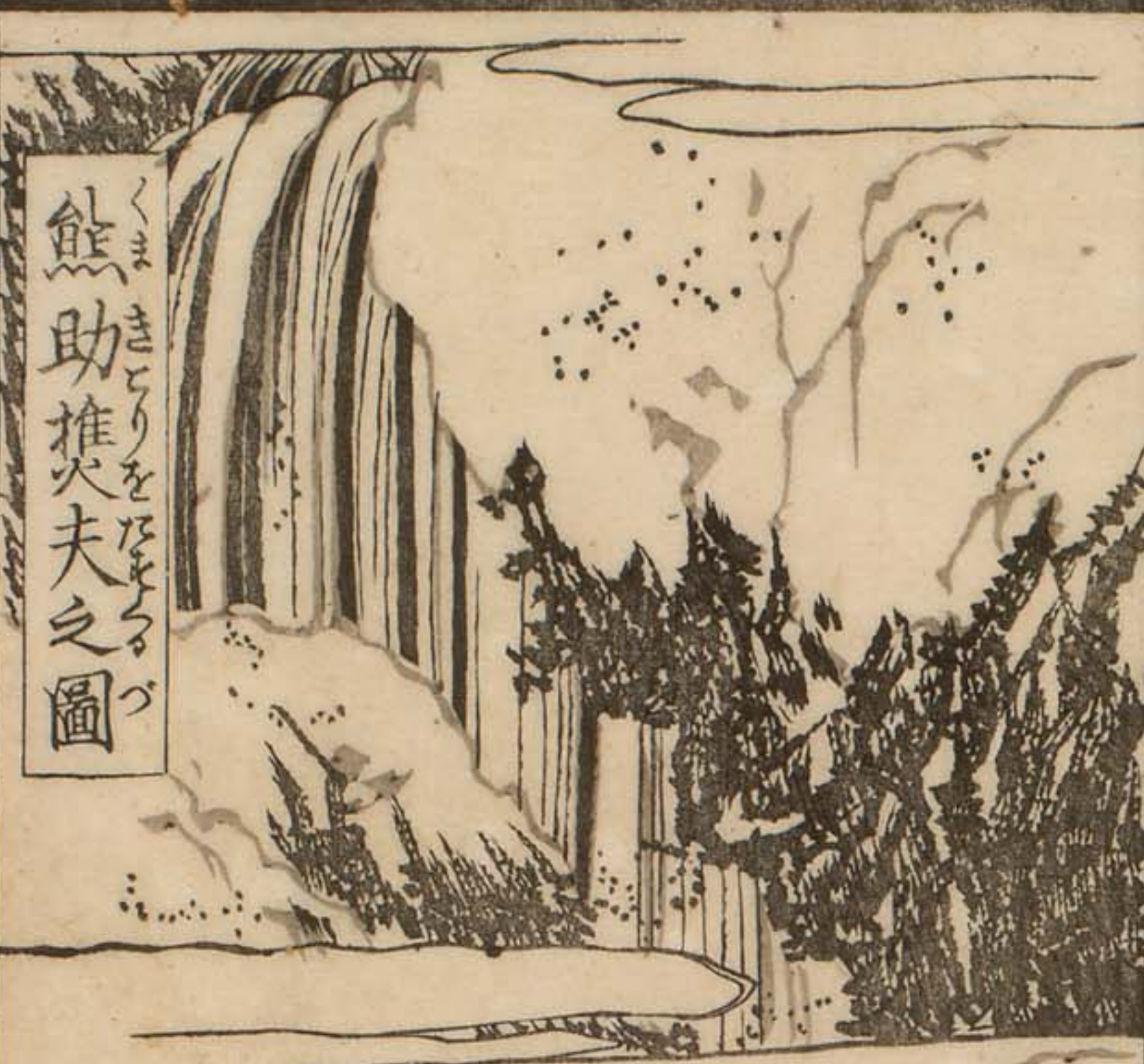
いんともせんまづ惘然とく月せまりいんせんといふ思案さく出さる死さ

是より熊の話今一盃さるるごとく自酌てあきり小喫腰より烟艸俵を

老農の語生事圖



京水筆



熊助樵夫之圖



牧之筆

いづて煙を吹くともや其次はいづれけむと老父曰く傍を見まば
潜ひそ死しやどの岩窟いわくあり中うちに雪もあはれぬふとて温ぬる之の此時ときあ
らづき腰こしをさぐりたるふ握飯にぎひの弁へん當あたりつちかゝりかゝる飢死うまひを
さりうづ雪を喰くても五日や十日命あづきその内うちに雪車ゆきぐるま哥うたの声こゑを聞きこふ
村むらの者ものと大声おほこゑあげて叫よぶ助すけとてふつけても伊勢いせさぬと善光寺ぜんくわうじさぬを
かゝるやよりやうとあきりふ念佛ねんぶつ唱となへ大神宮おほみやうをいのり日もくまかりし
ころを寢所ふしどふせむと闇地くらみを探さがりく這入こりてふ次第しだいふ温ぬる之の猶なほも探さがり手先てまた
ふ障さうりへ正ただしく熊くま之の愕然がく然とて胃いも裂されるやうと逃のがれ道みちをくても命いのちの期きを
死しも生いも神佛かみぶつふまうとと覺悟かくごをきりぬけふ熊くまどの我われハ新あらたよりふ来きり谷や落おち
るものへ飯いひや道みちをく生いて居ゐる喰物くものをくとも死して命いのちを壁かきて殺ころはしめ
ゆ情なさけあはれ助すけなむと怖おそく熊くまを扶たすけま熊くまハ起おちりたるやうにありけむ
しありてまゝといふ我われを尻しりめてかゝるや熊くまの居ゐる跡あとを壁かきへふそのあはれ

踏所もあはれ火點頃宿へうつしふ此時近所の人とあつまり念仏やてぬきし兩親
 もどめ愕然せしと幽霊あらんとて立さるるをうづき月代ハ蓑のやうふのび面ハ疵
 のやうふ瘦さう幽霊とて立さるるものちハ笑とありて兩親ハさう人ともうさうさび
 新とりふしで一四九日目の待夜とていさるる佛堂も俄ふれでた酒宴とあり
 仔細ふ語りしハ九重門といひ小間居の農夫とき其夜燈下ふ筆をととり
 て語りしを記しあきし今ハむしとありけり

○雪中の虫

唐土蜀の峨眉山より夏も積雪あり其雪の中は雪蛆と云ふ虫あるや山海經に云
えり唐土此説空しくむ越後の雪中は雪蛆あり此虫早春の頃より雪中に生ず
雪消終ば虫も消終る始終の死生を雪と云ふを字唇を按ぬ蛆は腐中の蠅と云ふ所
謂蛆蠅之蛆は蠅の類人を螫と云ふ蜂の類は雪中の虫は蛆の字に从ふべし云々雪蛆
ハ雪中の蛆蠅也木火土金水の五行中皆蟲を生ず木の蟲土の蟲水の蟲ハ常に見る所なり

らうろうろと蠅ハ灰より生ぜ灰ハ火の燼末とありまば蠅ハ火の炎に蠅を殺して形あるものの灰中
 ふひけむ蘇へて其ハ人の熱より生ぜ熱ハ火之火より生る其由多小蠅も虫も共ハ暖まるべ
 おのみ金中の虫ハ肉眼ふかよぶざる冥塵のごとし其由多小人こそをあらざれば、あまた銅鑊の腐
 もいぬ虫を生ぜ虫の生ずる野色を愛せあづくことを拭ハ虫をこころえ多其所腐を鏽
 ハ腐の始鏽の中なるは虫あり肉眼ふかよぶざる多人あきぎ之蘭人の金中猶虫あり雪中
 虫無んやあらまじとも常をうるまじき奇に如くとて唐土の昏れも記せり我越後の雪蛆ハ
 ろひさたる蚊の如し此虫ハ二種あり一ツハ翼あつて飛行一ツハ足細のまじとも感く蚊行共
 小足六あり色ハ蠅ハ似て淡く黒ハ其居る所ハ市中原野蚊ハちやうどあまじとも

○雪蛆の圖ちぢぢ



人を蟄むふあゝを以て驗微鏡を以て
視る所をこふ圖にて物産家の
説を俟つ

○雪吹

雪吹ハ樹をこみ積りたる雪の風散れしをいふ其状優美のゆゑ此のちを
是小比して花雪吹といひて古哥中もあまのうをえり是東南寸雪の国のち
北方丈雪の国我々越後の雪深とるの雪吹ハ雪中の暴風雪を卷騰騰之雪中第一
の難義こそがふあふ死せる人年々この一ッを奉てて小記一寸雪の雪吹のきしを
觀人の為小丈雪の雪吹の愕胎を示す
余が住塩澤小遠るる村の農夫男一人あり篤実にして善親小仕ふ廿二歳の冬
二里あまり隔る村より十九歳の娘をむりて小容姿憎うげ生質柔従ひて糸織
の伎中も伶俐とて男姑も可愛がり夫婦の中も睦く家内可説春をむり其年
九月のちめ安産してあらも男子ありて掌中小珠を得る心地ゆく家内
悦びいさゝ産婦も健小肥主乳汁も一子小餘るほどとて小兒も肥太り可賀名を
つけし十歳を壽けり此一家の者まで篤実とて耕織を勤行小農夫の事と

雪譜卷之上

も貪うる善男をもち良娘をむり好孫をまうけりて一村の人々常小羨なり
かゝ善人の家小天災を下あゝ如何とや〇かゝて産後日を歴てのち連日の雪
も降止天氣穏る日娘夫小むり今日ハ親里へ行んといふやせんといふ男
旁小ありてふいふ男も行ア実母も孫ををせりてふせ夫婦も自
慢せりといふ娘うちあつて姑小かくといふ姑ハ俄小土産をど取とる間小娘
髪をゆひあてて曙の衣類を着し綿入の木綿帽子も寒国の習とて見小く
うづ見を懐小いふに入んとする小姑亭よりよく乳を吞せといふ途小
てハ袖小福のさくうると一言の詞小も孫を愛も情をこめたる夫ハ其装笠
搗脚衣をんを穿晴天中農夫の常と
夫婦袂をつら小喜躍て立出たり正是親子が一世の別と後の悲難とあり
けり〇さるやと小夫ハ先小立妻ハ後小あゝいひやとつとふ小いふ今日ハ頃目の
目扣よりてをかひいふと今日夫婦孫をつとる来る一と親小あり

玉ふすト孫の顔を見玉ふさそりしよりさびあふんささふい父翁いり
なや来りしと母人いし赤子を見ぬさるゆゑこそさうの喜悅あふん逢
るる一宿もよりうん郎も病ぬ不可也二人とまりあふ西親業ぬんささ
飯づーあどさるの間の啼乳房々ませつうちつて道をいそ美佐嶋と
い原中小到一時天色倏急小寝り黒雲空小覆ひけさる是雪中 夫空を見
大小驚怖ふ雪吹るんいせん跟蹤うち暴風雪を吹散る巨濤の岩を越
るるごとく飈雪を卷騰て白竜峯小登がごとく朗々ありしも掌をうさごとく天
怒地狂寒風ハ肌を貫の鎗凍雪ハ身を射の箭之夫ハ蓑笠を吹とさ妻ハ帽子を
吹ちぎさる髪も吹とさ吐嗟といふ間小眼は襟袖ハさる裾も雪を吹いと全
身凍呼吸迫り半身ハ己小雪小埋れらるる命のきりあふ夫婦声をあげ
わうい〜と哭叫とも往來の人もさる人家も遠けさる助る人あり手足凍て
枯木のごとく暴風小吹僵と夫婦頭を並て雪中小倒と死けり此雪吹其日の

雪譜卷之上

北一

文溪堂藏

暮小止次日ハ晴天ありけさる近村の者四五人此所を通りかりしふの死骸ハ雪吹
小埋れさるるえさささる赤子の啼声を雪の中小きけさる人々大小怪しきとて
逃んとさるる在り剛気の者雪を掘さるる小まづ女の髪の毛雪中小頭より扱ハ
昨日の雪吹倒さるる里言ふとて皆あつまりて雪を掘死骸を見る小夫婦手を引
あひく死居さる見ハ母の懐小あり母の袖見の頭を覆ひさる見ハ身小雪をさ
觸さるゆゑ小凍死と兩親の死骸の中より又声をあげてささる雪中の死
骸さるる生るがごとく見知らる者ありて夫婦あることをあり我見をいさる
袖をかひ夫婦手をささるささる死さる心のうちかひやとてささる若者ら
も泪をささる見ハ懐小い死骸ハ蓑小つと夫の家小荷ひおさるるの兩親ハ
夫婦娘の家小一宿とあさひをりし小死骸をえて一言の詞もさる二人が死
骸小とりつ死顔小うをかりあて大声をあげて哭さるハさるも憐のありさる一人
の男懷より児をいささる姑小ささるけさる悲と喜と兩行の涙をささるける

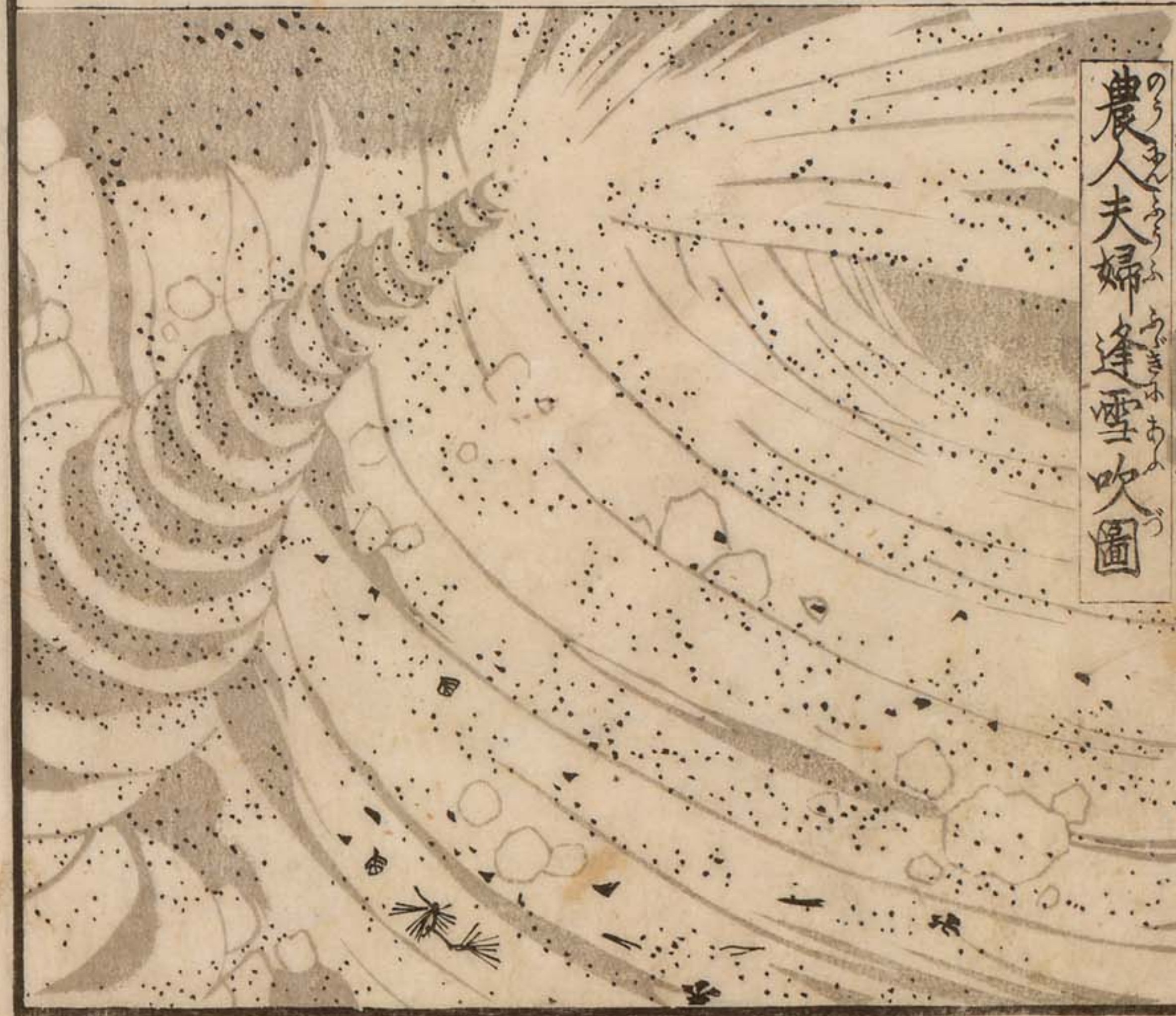
とぞ

雪吹の人を殺さるゝ大方右小類を暖地の人花の散小比く美賞する雪吹と
其異こと潮干小遊びく樂と供漕小弱て苦もの如く雪国の難美暖地の人
あひひをうるぐ連日の晴天も一時小愛く雪吹とるゝ雪中の常々其力樹を
抜屋を折人家こまゝ為小苦むる牧拳ぐく雪吹小逢る時ハ雪を掘身を
其内小埋まバ雪暫時ふつり雪中ハくつて温るる気味ありく且氣息を漏
死をすめぐるゝあり雪中を歩くる人陰囊を綿ゆつてむるをををををを
ハ陰囊まづ凍て精気尽るゝ又凍死するを湯火をのりて温まバ助るゝあまど
も武火熱湯を用ふるゝ命こまゝりるもの春暖小いこまバ腫病とるゝり
良医も治ーぐく凍死するゝ塩を敷て布小包まづ膝をあゝあ搗火
の弱をのりて次第小温づー助りるもの病を護せバ人肌を温む手足の
凍るゝも強き湯火をあゝむまづ陽氣いこまバ灼傷のごとく腫つゝ小腐

雪中捕熊圖



農人夫婦逢雪吹圖



京水筆



越後の国魚沼郡五日町といふ驛より近き西の方小低き山あり山の裾小溝在
天明年中二月の頃この山より小童どもあつまりてさあぐの戯をうて遊倦
木の枝をあらめ火を焚てあつたりをりし其所よりもとてをりて別火
燄と燃あがりけり見曹大ふいと見ゆ四方小逃散けりその中一人の童
家より事仔細を親に語りし此親心ある者ゆてその所より火の形
状をえりしむと消ざる雪中小手を入るべきやとの孔をり孔より三四寸の
上小火燃る熟覧ありて正しく妙法寺村の火のるるなりと火口小石
を入ててを消し家よりて人小語を雪きえてのち再その所よりて見
る小火のるるなりと小溝の岸へ火燄をりて幾燭小火をりて試小池中小投
いし小池中火を出せり庭燎のごとく水上小火燃る妙法寺村の火よ
りも奇ごとく驛中の人と来りててを視るものち銭小才人かの池のほと
り小温屋をつくり篋を以て水をとるごとくて地中の火を引き湯槽の電

雪譜卷之上

小燃し又燈火中も代る池中の水を湯小燂し價を以て浴せしむ此湯硫黄の
気ありて能疥癬の類を治し一時流行して人群ををせり○按小池中小水
脈と火脈とあり地ハ大陰より多水脈ハ九分火脈ハ一分なりかゝるが如多小水脈ハ
甚稀地中の火脈凝結とてかゝるが如き氣息を出さる人の氣息のごとく肉
眼より見え火脈の氣息小人間日用の陽火を加ふれば燭をるるを
陰火といひ寒火といひ寒火を引小篋の筒の焦るハ火脈の氣息も陽火を
うけて火とてさる氣息をりあるが如き陽火をうくまば筒の口より一二寸の上
小火をるるを以て火脈の氣息の燃るを知りて妙法寺村の火も是と
余が發明ありて古書小據て考得る所と

破目山

魚沼郡清水村の奥小山あり高さ一里あり周圍も一里あり山中をへく
大小の破隙あるを以て山の名とて山半ハ老樹條をつゝ糸半より上ハ岩石

疊々として其形竜躍虎怒のごとく奇々怪々言々寸篠の左右小溪川あり合
て滝を流るる絶景又言々早の時此滝壺小雪をまじへるべし驗あり二年四月の
半雪の消る頃清水村の農夫ら二十人あがり集り熊を狩んとく此山のやう
りの破隙の窟をりける所なるべし熊の住處あると例の番椒烟草の莖を薪に
交窟のぞんで焚火をくふ熊はさるふ出で窟の深き處小烟の奥にぞるあんと
次日ハ薪を増し山も焼よと焚火をくふ熊はてて一山の破隙をかくとより烟をい
ごて雲の起る如くありけまき奇異のものをり熊を狩るて空しく立ち上り
と清水村の農夫が語りぬあつた山半より上ハ岩を骨とて肉の土薄く地脉
氣を通じて破隙をるにや天地妙くの奇工思量づるべし

○雪顔

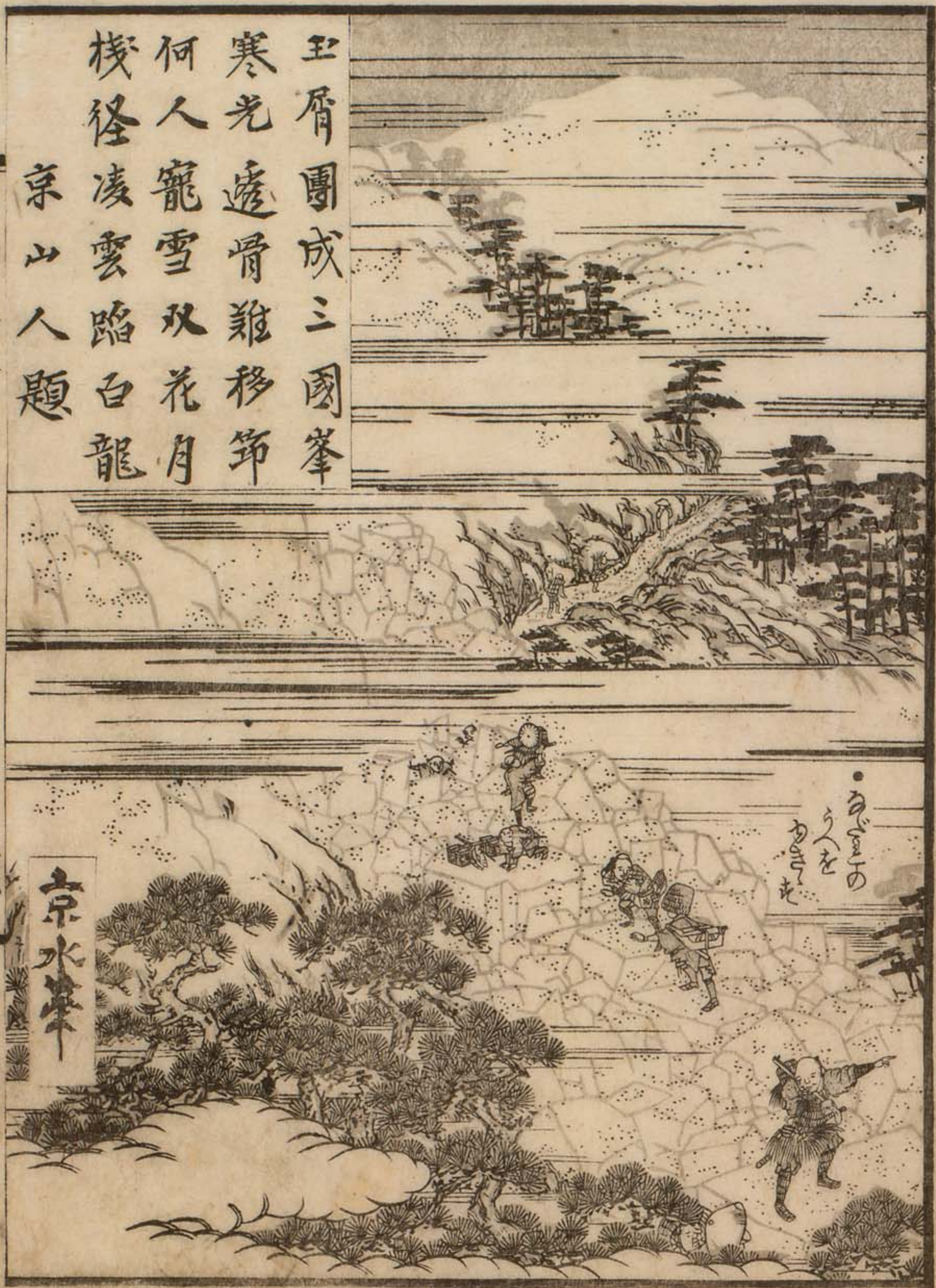
山より雪の崩顔を里言ふる言々としふ又言々としふ按ふる言々ハ撫下るるを言
ひの活用ことばなり山あもりのことハ雪顔の字を借る用ふ字書ハ顔ハ暴風

三國嶺雪顏の上往來の圖



玉屑團成三國峯
寒光透骨難移節
何人寵雪双花月
棧徑凌雲臨白龍

京山人題



あき
うを
あき

京水峯

ともあまびよく叶いしやさて雪類ハ雪吹ハ双て雪国の難美と云高山の雪ハ里
よりも深く凍るも又里よりハ甚し我國東南の山々里ハちう然も雪一丈四五尺な
るハ浅しと云此雪と云りて岩のごとくあるもの二月のころふりて陽気地中より
蒸る解んと云る時地氣と天氣との爲ハ破て響をうけ一片破て片々破る其ひき
大木を折ぐごとしと云雪類んとするの崩之山の地勢と日の照をともよりてな
だる処と云るまじき處ありあるるる二月ふあり里人ハその時をあり処を
あり崩を知る也あるるまじきのよめハ撃死するもの稀とあるまじき天の氣候不意
ゆへ一定あるまじき雪類の下ハ身を粉ハ碎もあり雪類の形勢いふんと云る
あるまじきと云る雪の凍るの大ハ十間以上小ハ九尺五尺ふある大小數百
千悉く方をうて削りてまじきと云るまじき下ハ舟を
上より一度ハ崩類とその響百千の雷をうて大木を折大石を倒是此時ハか
るまじき暴風力をうて粉ハ碎る沙礫のごと云雪を飛せ向日も暗夜の如く

その慄^{おそ}たる筆^{ひつ}命^{めい}小^{せう}尽^{じん}が^が此^こ雪^{ゆき}類^{るい}命^{めい}を捨^すて人^{ひと}命^{めい}を捨^すて人^{ひと}我^{われ}が
見^み聞^{きこ}するを次^{つぎ}の卷^{まき}小^{せう}記^きて暖^{だん}国^{こく}の人^{ひと}の語^ご柄^{へい}と云^い

或^{ある}人^{ひと}問^と曰^{いは}雪^{ゆき}の形^{かたち}六^む出^{しゅつ}する前^{まへ}小^{せう}弁^{べん}ありて詳^つ之^を雪^{ゆき}類^{るい}ハ雪^{ゆき}の塊^{かたまり}なりん碎^{くず}る
形^{かたち}雪^{ゆき}の六^む出^{しゅつ}する本^{ほん}形^{かたち}を^をしるひ^ひて^て方^{かたち}形^{かたち}ハ^ハい^いん^ん者^{もの}て曰^{いは}地^ち気^き天^{てん}小^{せう}實^{じつ}格^{かく}
て雪^{ゆき}と^とる^るも天^{てん}の曰^{いは}と地^ちの方^{かたち}とを併^{あひ}合^あて六^む出^{しゅつ}する^る六^む出^{しゅつ}ハ四^し形^{かたち}の
裏^{うら}之^を雪^{ゆき}天^{てん}陽^{やう}を離^{はな}て降^{くだ}り地^ち小^{せう}飯^{はん}ハ天^{てん}陽^{やう}の曰^{いは}象^{さう}と^とて地^ち陰^{いん}の方^{かたち}と
本^{ほん}形^{かたち}小^{せう}象^{さう}と^とる^るも小^{せう}雪^{ゆき}類^{るい}ハ千^{せん}も万^{まん}も圭^{けい}角^{かく}と^とる^るも^も解^{かい}と^とる^るも^も角^{かく}と^とる^るも
曰^{いは}く^くる^るも^も陽^{やう}火^かの目^めふ^ふて^てる^るも^も天^{てん}の曰^{いは}ふ^ふる^るも^も陰^{いん}中^{ちゅう}小^{せう}陽^{やう}を包^くて
陽^{やう}中^{ちゅう}小^{せう}陰^{いん}を抱^だハ天^{てん}地^ち定^{じやう}理^り中^{ちゅう}の定^{じやう}格^{かく}と^とる^るも^も老^{らう}子^し經^{きやう}第^{だい}四^し十^{じゅう}二^に章^{しやう}小^{せう}曰^{いは}萬^{まん}物^{ぶつ}負^お
陰^{いん}而^に抱^だ陽^{やう}冲^{ちゅう}氣^き以^{もつ}為^な和^わと^とる^るも^も此^こ理^りを以^{もつ}て^てる^るも^も時^{とき}ハ^ハ内^{ない}美^みさ^さぬ^ぬり^りも^も
内^{ない}美^みさ^さぬ^ぬる^るも^も陰^{いん}中^{ちゅう}小^{せう}陽^{やう}を抱^だて^て天^{てん}理^り小^{せう}叶^えと^とる^るも^も夫^そ夫^ふ小^{せう}代^{だい}り^りて理^り屈^{くつ}
を^をい^いふ^ふも^も家^け内^{ない}治^ちと^とる^るも^も理^り屈^{くつ}小^{せう}過^か牝^{めい}鳥^{てう}且^{かつ}を^をつ^つも^も此^こ理^りを以^{もつ}て^てる^るも^も

又^{また}家^け内^{ない}の陰^{いん}陽^{やう}前^{ぜん}後^ごて^て天^{てん}理^り小^{せう}違^{ちが}ふ^ふも^も家^けの亡^なる^るも^もと^とる^るも^も萬^{まん}物^{ぶつ}の天^{てん}
理^り証^{しやう}と^とる^るも^も方^{かたち}形^{かたち}の^のも^もあ^ある^るも^も十^{じゅう}八^{はち}方^{かたち}形^{かたち}を^をう^うる^るも^も七^{しち}八^{はち}方^{かたち}形^{かたち}を^をう^うる^るも^も故^{ゆゑ}
小^{せう}此^こ説^{せつ}を^を下^{くだ}せ^せり雪^{ゆき}類^{るい}の圖^ず多^{おほ}く方^{かたち}形^{かたち}小^{せう}ハ^ハあ^ある^るも^も其^{その}七^{しち}八^{はち}を^をと^とり^りて撰^{せん}
様^{よう}を^を為^なす^すの^のも^も

越後古所

壬辰

花

